

■エッセイ

「縄文の美」－岡本太郎とその周辺－

佐々木 勝（副館長）

■芸術家としての岡本太郎

日本初のノーベル賞作家となった川端康成が、1972年に自ら命を絶ったとき、「仕事の机の上には、『岡本かの子全集』の内容見本の下書が散乱していた」と瀬戸内寂聴が記しています。彼女自身、岡本かの子の伝記小説である『かの子撩乱』を著して世に出た作家で、かの子の息子、岡本太郎とも親交がありました。その岡本太郎は、すべてを焼失した戦後の一時期、鎌倉の川端宅に迎えられするなど、母の師、川端康成の厚い好誼を受けつづけていたのです。

川端康成が亡くなった2年前の1970年には、やはり作家の三島由紀夫が、割腹自殺を遂げるという大事件が起っています。1970年は、第二次安保闘争や「よど号」ハイジャック事件なども勃発した激動の年でしたが、何と言っても、この年最大の事件は、日本中が興奮に沸き返った「日本万国博覧会」、通称「大阪万博」の開催でした。この万国博覧会のテーマプロデューサーとなったのが岡本太郎で、彼は、万国博のシンボルとして巨大モニュメント「太陽の塔」を制作しましたが、この太陽の塔は、後に万国博成功の要因の一つとまで評価され、永久保存が決まったように、大方の予想に反して人びとから愛され、万国博随一の人気者になりました。

ところが、岡本太郎の秘書で、約50年にわたって制作活動に立会い、後年養女となった岡本敏子によれば、岡本太郎は、テーマプロデューサーに就任した当初から「万国博のテーマ“進歩と調和”には反対だ」と公言しており、しかも、太陽の塔は「反博」の象徴としての意味合いを持っていたと言うのです。テクノロジーの発達を進歩と認めない岡本太郎は、「人類は進歩なんかしていない。何が進歩だ。縄文土器の凄さを見る。ラスコーの壁画だって、ツタンカーメンだって、いまの人間にあんなもの作れるか」とも述べているのです。

■岡本太郎による縄文土器の「発見」

まったくもって不思議なことですが、縄文土器を「日本美術史」の中で語れるようになったのは、つい50年来のことで、岡本太郎の登場（『縄文土器論』『みつゑ』1952、『日本の伝統』1956）を待たなければなりません。いまでこそ、あらゆる美術史の解説書にその美を称えられている縄文土器も、岡本太郎の審美眼が公にされる以前は、美とは何かに最も敏感なはずの美学専門家の目に留まることはなく、まともにとりあげられることもなかったのです。

このことは、縄文美術の評論家でもあった詩人の宋左近、日本文化への縄文の伝統を説く哲学者の梅原猛、日本近現代史に独自の史観を展開した作家の松本清張や司馬遼太郎など、多くの文化人がその著作で指摘しており、等しく岡本太郎の業績として認めているところです。

1951年の秋、東京国立博物館に陳列されていた考古資料の中から、偶然縄文土器を目にした岡本太郎は、電撃的な感動を覚えたといい、そのとき受けた強い衝撃を次のように表現しています。

「縄文土器にふれて、わたしの血の中に力がふき起るのを覚えた。潤然と新しい伝統への視野がひらけ、我国の土壌の中にも掘り下げるべき文化の層が深みにひそんでいることを知ったのである。民族に対してのみではない。人間性への根源的な感動であり、信頼感であった」。

岡本太郎は、18歳で渡ったパリに永住する決意であつたらしく、本来の目的である絵の勉強のほかに、語学、歴史、数学などをフランス人と一緒に学び、後にはパリ大学でマルセル・モースに師事して民族学も修得しています。あまり知られてはいませんが、このパリ大学時代には、先史美術のコレクションで埋もれた研究室で、多くの時間を過ごしていたと言われています。

ところで、岡本太郎は21歳の夏、ピカソ

の抽象画と出会い、これを契機として純粹抽象の道につき進むことになってしまいました。縄文の美の「発見」は、巷間、このピカソの影響によるものと伝えられていますが、本格的に学んだ民族学の素養も、その一因として無視することはできません。

■思想家としての岡本太郎

「激しく追いかぶさり重なり合って、隆起し、下降し、旋廻する隆線紋。これでもかこれでもかと執拗に迫る緊張感。しかも純粹に透った神経の鋭さ。常々芸術の本質として超自然的激越を主張する私でさえ、思わず叫びたくなる凄みである」。

これは、岡本太郎の「縄文土器論」の一節ですが、後に彼自身が「超現代日本的美観」と表現した「中期の縄文土器」によせる、熱い情感が生々しいかたちで伝わってきます。帰国以来、日本の伝統芸術に対する失望と不満を隠さなかった岡本太郎は、縄文土器と出会うことによって、はじめて「日本が世界に誇るべき美」を見出し、芸術であると宣言したのでした。

土器や土偶など、縄文人の純粹な造形力を追及した岡本太郎の眼は、その後、現代日本の深部を見つめ直し、日本文化を再発見するための旅へと向かいます。

この思索の旅は、ルポルタージュ形式の野心的な日本文化論として結実（『日本再発見—芸術風土記』1958）しますが、後年の著作（「オシラの魂—東北文化論』『神秘日本』1964など）を含め、岡本太郎が東北地方の歴史、風土に、並々ならぬ共感を抱いていたことが読み取れます。

そして、この共感の意味するところは、いま私たちが到達している東北史観の先取りではなかったかと思うのです。岡本太郎は、東北の地に、彼の言う「原始狩猟民」の残影を認め、その深みに宿している縄文人の魂、あの土器に表現された生命力を見出していたに違いない、と。

（文中、敬称は略させていただきます）